

作品研究) 社会実装を目指した作品研究の報告 —作品「Luminous Veil (光をまとうヴェール)」についての報告—

Report on Research for Social Implementation of Artworks —Report on the Artwork “Luminous Veil”—

市村安珠¹⁾ 菊池信二²⁾ 西将隆²⁾ 栗本佳典²⁾
阿部高広²⁾ 富田知子²⁾

抄 録

本学専攻科2年間の学びと習得した技術を基に、人体表現としての作品「Luminous Veil (光をまとうヴェール)」の制作を行った。大きなテーマは、アール・ヌーボーを基にした曲線と生命の強さとはかなさの両面である。制作にあたり、衣装は文化服装学院のデザイナー堀江優佳氏によるものを採用し、神々しさを意識したデザインとなった。最終的に、ヘアと衣装とモデル、撮影技術を含めて、コンセプトである女神をイメージする表現が完成した。

キーワード：アール・ヌーボー 女神 洗礼 神々しさ

I. はじめに

今回専攻科2年間の学びで獲得した技術等を用いて、作品制作を行った。制作は、1年次の「デザイン演習Ⅰ」でのアール・ヌーボーおよびアール・デコをテーマにデザインの持つ意味について学んだことを活かして、メイクデザインした。そのコンセプトをベースに「美容デザイン演習Ⅱ」および「美容芸術研究」において、人体表現としてさらにトータルな創作に着手した。創作にあたり、文化服装学院のデザイナーにコンセプトに沿った衣装提供を依頼し、お互いのデザインコンセプトの協議を行い、デザインを完成させた。さらに、イメージにあったモデルへの依頼とコンセプトの説明を行った。次に、写真指導の教員と協議を行い、ライティングの設定をし、撮影を行なった。

- 1) 美容デザイン演習Ⅰ：ここではアール・ヌーボーを選択し、メイクをウィッグに行った。(写真1)
- 2) 美容芸術研究：アール・ヌーボーを大テーマにおいて人体表現としての総合デザインコンセプトの構築にあたり、アイデアソースを収集した。
- 3) 美容デザイン演習Ⅱ：作品を制作するにあたり、堀江優佳氏の衣装を採用した。衣装デザイナーとの協議を行い、コンセプトに沿ったヘアメイクデザインを作成した。

衣装デザインコンセプト：先入観でタブー視されることに、そして社会に対して透明性を持つことでキレイなものに変える。本来、体を隠す服を部分

的に溶かし、できた穴にレースを配し、それをフィルターとしてみることで隠れている身体は綺麗に見える。

ヘアメイクコンセプト：社会的通念では、性と聖は対極に存在する。しかし、それらは一つの生命のなかでは共存する。衣装でのレースを通してタブーとされるものを見るとき、そこには本来の生命の美しさを垣間見ることができる。

ヘアスタイルは、聖母マリアのヘアスタイルでもあるロングスタイルで、色は純粹さをイメージするやわらかい白で表し、生命観は、女性美を強調したメイクから感じさせるようにした。

頭部には「内面からの光、心理・愛・悟り・神聖さに満ちていること」を表す「Halo (ヘイロー後光)」を配する。

II. 作品紹介

作品の制作については、以下の通りである。

1) 使用材料

発泡スチロール・アクリル絵の具 (ゴールド)・パール・バラの造花・自作のハートパーツ (レジンにて作成)・ストーン・真鍮丸棒・竹丸棒

2) 制作方法

発泡スチロールで光輪を2個作成した後、アクリル絵の具で全体を塗り、その中に均等にストーンを貼る。輪の中の下部分にゴールドに塗装済みのバラを盛り付け、輪の周りに均一に取り付けた。金色に着色した竹丸棒の先に自作のハートパーツを乗せたものと、より光を演出する真鍮丸棒を配置した。これらを施した後、2つ輪を貼り付け、それをカチューシャに取り付けた。

1) ICHIMURA Anju

2) KIKUCHI Shinji, NISHI Masataka, KURIMOTO Yoshinori
ABE Takahiro, TOMITA Tomoko

山野美容芸術短期大学 1) 専攻科2年生 2) 教員
連絡先: 〒192-0396 東京都八王子市鎌水 530

3) モデルの毛髪処理

今回のイメージから、毛髪の長さとベージュ色が必要なため、ロングの人口毛のウィッグを使用した。前髪と両サイドにはスライドカットでレイヤーを入れ、軽さと透け感を表現した。

4) ヘッドピース作品の取り付け方法

ヘッドピースのカチューシャを、使用しているウィッグの土台にピンを使用して取り付けた。

III. 考察と今後の課題

本作品「Luminous Veil (光をまとうヴェール)」は、アール・ヌーボーを基盤とした人体表現として、「女神・洗礼・神々しさ」をテーマに制作した作品である。本制作を通して、衣装・撮影・ネイルそれぞれの役割と、それらが統合されることで生まれる表現の力について、深く学ぶことができた。衣装は外部デザイナーによる作品を採用したが、そのコンセプトである「先入観やタブー視されがちなものに透明性を与えることで、美へと変換する」という考え方は、本作品の世界観と非常に高い親和性を持っていた。本来、身体を隠す役割を担う服を溶かし、透けさせることで、レースがフィルターとなり、直接的ではない形で身体の美しさが立ち現れている。その表現は露出ではなく、むしろ、洗礼を受けた存在としての神聖さや気高さを感じさせ、女神というイメージを成立させる重要な要素であった。自身で制作していない衣装であっても、コンセプトを正しく理解し、それに沿ったヘアメイクやネイルを構築することの重要性を学ぶ機会となった。

撮影では、神々しさという抽象的なイメージを視覚的に表現する難しさを強く感じた。背景には無彩色のグレーを用い、余計な情報を削ぎ落とすことで、モデルと光そのものが際立つ空間を作り出している。ライティングでは、単に明るく照らすのではなく、光の反射やにじみを意識することで、後光のような効果を生み出し、女神としての非日常性を表現した。光の当て方ひとつで印象が大きく変化するため、写真の指導教員との綿密な協議を重ねながら調整を行った点は、作品の完成度を高めるうえで、非常に重要であったと感じている。

ネイルデザインでは、「女神・洗礼・神々しさ」というテーマを、素材選択と技法によって表現することを重視した。ベースにはクリアジェルや乳白色のジェルを用い、肌がうっすらと透ける質感を意識することで、透明性と清らかさを表現している。

装飾にはレース素材を封入する技法を取り入れ、衣装のレースと視覚的に呼応させることで、身体全体の統一感を図った。また、パールやクリスタルストーンを使用し、洗礼の象徴である純粋性や、光を受けて変化する神秘的な輝きを指先に与えている。フォルムは長さのある形状を採用し、現実から切り離された神話的存在としての非日常性を強調した。

本制作を通して、衣装・撮影・ネイルはそれぞれ単体で成立するものではなく、共通のコンセプトを軸に統合されることで、初めて一つの強い表現として成立することを実感した。特にネイルは身体の末端に位置しながらも、素材や技法によって作品の思想を伝えることができる重要な表現手段であると再認識した。今後は、社会に存在する価値観や先入観を美容表現によって可視化し、見る者に新たな視点を提示できる作品制作を目指していきたい。

謝辞

制作にあたりご指導頂きました文化服装学院の森本慧先生、齋藤房枝先生、ご協力いただいたデザイナー堀江優佳様およびモデルの古見美柚子様に心より感謝申し上げます。



写真 1a

写真 1b

写真 1 a,b: タイトル「Lava Univers」

「美容デザイン演習Ⅰ」でのアール・ヌーボーをテーマにしたメイク作品



竹丸棒



アクリル絵の具で採色



